

生成AIを活用したソーシャルスキルトレーニング

笹野達哉

1. 主張

相手の表情や気持ちを理解するのが難しい場合、ソーシャルスキルトレーニングなどを行い、自分の気持ちや置かれた状況を理解する訓練を行い、実際の場面で、相手に的確に伝えないといけない。しかし、相手がいないと成立できないことが多いため、ChatGPTを使った練習方法を提案する。

2. 主張について

最近の小中学生はスマホやパソコンを使って、コミュニケーションをとっている。保護者とのコミュニケーションでは、「はい」「わかった」や、習い事が終わったら「今から帰る」といったごく簡単な内容が多い。しかし、友だちとのコミュニケーションでは、それではけんかになってしまうことがある。なぜなら、顔を合わせていないだけに、相手の表情や感情が伝わらず、お互いに一方的に攻撃してしまうことになりやすいからである。

仲のよかった友達同士が、突然いじめの対象として攻撃するという事件はよくある。この場合、相手の表情や気持ちを理解することが出来ず、相手に正確に言うことができないためである。このことに対応するために、相手の話を上手に聞いてから、伝えたいことを最後まで言うスキルが大事である。しかし、自分でスキルアップが難しいため、ChatGPTでスキルアップできることを提案する。

3. 学年・教科

小6、道徳

4. 学習指導要領

小学校学習指導要領の第一章総則の第3章 教育課程の編成及び実施 第1節 小学校教育の基本と教育課程の役割 3 育成を目指す資質・能力の事項③学びに向かう力、人間性等を涵養することの項目に次のような文言がある。

児童一人一人がよりよい社会や幸福な人生を切り拓いていくためには、主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する力、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度等が必要となる。これらは、自分の思考や行動を客観的に把握し認識する、いわゆる「メタ認知」に関わる力を含むものである。

上の「自己の感情や行動を統制」「人間関係」を育てるためには、対話力が必要である。前述した「心を開き、言葉で語る」ことによって、教師と児童の信頼関係は深まり、児童相互の好ましい人間関係が築かれていく。

では、「言葉の力」を育てる対話力を磨くためにはどうしたらよいか。次の三点を強調しておきたい。

- ① 価値ある話題を発見させ、共有させよう。
- ② 共感的態度で対話させ、共通点と相違点を明らかにさせよう。
- ③ 対話の方法を理解させ、生産的で創造的な問題解決を図らせよう。

①は、学級活動における様々な問題(たとえば、いじめ・席替えなど)を見つけ、それらを学級全体の課題として共有するということである。価値ある話題の発見が対話力を磨く第一歩である。

②は、心理学でいう共感か感情移入(empathy)のことである。「うん」「なるほど」「それで」などの肯定的うなずきや同調の態度である。お互いの思いや考えと一致する点や違う点を明らかにしつつ対話する力を磨かせる。

③は、「対話法」の基本的な知識や技能を理解させ、活用させることである。そして、現状をよりよい方向へと改善し、改革していく前向きで生産的な対話力を磨いていく。そのことが創造的な問題解決力を育てていくことにつながる。

5. 教材について

(1) ネットいじめ

インターネット上におけるいじめおよび嫌がらせである。一定の人間関係のある者から、パソコンや携帯電話(スマートフォン等を含む)などのネット端末を経由して、物理的・心理的な攻撃が加えられ、被害者が精神的苦痛を感じていることである。炎上が原因で発生することも多い。酷い場合には身内や友達、同級生、同僚など被害者と関係の近い者が巻き込まれるケースもある。また、攻撃者は必ずしも知人とは限らず、見ず知らずの他人が攻撃をしてくるケースもある。

いじめ防止対策推進法(平成25年法律第71号)第二条第一項および第四条にて、通常のおいじめに加えてネットいじめ、サイバーいじめも禁止されており、同法第十九条第三項において、発信者情報の開示についても明記されている。ネットいじめは、2020年に厳密性の高い学術誌「Annals of Work Exposures and Health」に掲載された論文で、今後、労働者の健康に影響を与える重要な要因の1つとなると予測されている。

(2) ネットいじめの本質

『まともな日本語を教えない勘違いだらけの国語教育』の著書で元国立教育政策研究所の有元秀文氏によれば、「ネットいじめの本質は、私たちが人権意識を真剣に育ててこなかったからである。先日、小学校の授業を見ていたときのことである。児童が一生懸命長々と話しているのだが、よくわからない。そうしたら担任が笑い出して「だれかわかる?」と聞いたのだ。どんなにわからなくても真剣に聞き取るべきだ。」

(3) 毅然とした対応とカウンセリング的対応

ネットいじめは、事なかれ主義、問題の先送りが事態を悪化させている。その根本にあるのは、おかしいことをおかしいと言わない批判精神の欠落にある。

ネットいじめの兆しでも見つけたら翌朝校長が全校生徒に断固許さないことを伝える。全校でアンケート調査を行い、結果を分析し学級担任が学級の子もたちに絶対にやってはいけないことを伝える。緊急の保護者会を開いて状況をありのままに伝え、家庭の協力を訴える。このような緊急の対応を毅然とした対応というが、日本の学校ではまず毅然として行わない。そして問題が深刻化する。

なぜ毅然とした対応ができないのだろう。正義感と責任感とリーダーシップが希薄だからだと思う。

しかし、粗暴な正義感は危険である。ネットいじめをした高校生を生徒指導部で指導した晩に生徒が自殺したケースがあった。

人権意識は加害者にも向けるべきだ。教師は受容・共感・傾聴のカウンセリング技能を必ず講習会で学ぶべきだと思う。

(4) 人権意識を育てる長期的予防策

人権意識を育てるには教師自らの自省が必要である。遅れた子どもに愛情を注げない。すぐれた子どもをエコひいきする。理由を聞かず怒る。人権より学力を偏重する。そういう教師のオーラは子どもに移る。長期的予防策にはまずソーシャルスキルを教える。たとえば、いつもいじめられる子どもから一緒に帰ろうと言われたとき、どうやって拒否するかロールプレイで学ばせる。次に、差別や障害やいじめについての絵本や児童書を読んでディスカッションする。これは国語や学級活動や様々な教科の時間に根気よく継続的に行ってほしい。

(5) いつ誰が被害者になり、加害者になるか分からない

ネットいじめはネットの世界で起きるから、パソコンや携帯を使っていなければ被害に遭わないとは限らない。直接携帯にメールが入らなくても、ネット上で自分の名前を出されて中傷されることはある。子どもが携帯を持ってなくても、友だちから「〇〇ちゃん、こんな風にメールが流れていたよ」といわれたら、それだけで大いに傷ついてしまう。普段メールをする内容は、ごく簡単な内容が多い。習い事が終わったら「今から帰る」といった連絡や、保護者からのメールに「はい」「わかった」といった返信をするのがほとんどだ。顔を合わせていないだけに、相手の表情や感情が伝わらず、お互いに一方的に攻撃してしまふことになりやすい。一対一のけんかであれば、仲直りもしやすいが、そのメールを転送したり、べつの友だちにメールで相談したりすることによって、特定の子を悪者にしてしまうことも起こりがちである。

(6) ネットいじめから子どもの命を守る

ネットでの書き込みは匿名性が高い。だれかになりすまして悪用することも可能だ。だから遠慮がなくなる。「死ね」のようなひどい言い方が普通に通用してしまう世界だ。それに第三者も加わり、言われている方にすれば対応のしようがない「いじめ」につながっていく。

ネットいじめから守るために、教室での指導がとても重要だ。

- ① 携帯を持つならば、メールの制限やフィルタリング機能のあるものにする。
- ② 携帯アドレスは保護者の許可なしに人に教えず、安易に写真を撮らせない。
- ③ 知らない人からの電話やメールはすぐに保護者にいう。
- ④ パソコンや携帯はいつも保護者の目の届く所で使う。

ネットによるいじめは、いつ自分が被害者になり、加害者になってしまうか分からない。賢明な利用者になるよう、その使い方を教えていくことが必要だ。

(7) 軽い気持ちでの書き込みがいじめや犯罪になる

最近の小中学生はスマホやパソコンを使いこなしている。文字入力をうまくできない生徒はごくわずかだ。学校で学習してきた成果、そして家庭での普及によるものだろう。これらのツールを通して、中学生はコミュニケーションをとっている。直接、学校や塾でコミュニケーションをとる以上に、ネットが彼らにとっての重要なコミュニケーションの手段となっている。

メールでの一対一のコミュニケーションなら、相手がかかっていることが多い。しかし、ホームページを作り、そこに自分のプロフィールをのせ、掲示板に書き込みができるようにすれば、一対多、多対多のコミュニケーションとなる。その場合、相手の顔が見えにくくなったり、見えなくなったりする。また、書き込みをしている自分が誰なのか、相手にわからないため、

軽い気持ちで、コミュニケーションがとれる(書き込みができる)。

何気なく書いた悪口が、いじめや犯罪に繋がる。

(8)ルールやマナーを大人が教える

「ネットいじめ」とは、インターネット上で、特定の個人を誹謗中傷したり、個人情報や無断で掲載したりするいじめである。インターネットは、大変便利な道具だ。人類の生活を変えた発明である。しかし、負の部分もある。教師と保護者が連携し、インターネットの危険性を、子ども達へ伝えていかなければならない。

学校では、子ども達がインターネットを利用する際に、情報モラルについて教える必要がある。

- ① 自分がされて嫌なこと傷つくことは他人にもしない。具体的には、メール、チャットや掲示板に、悪口や他人の個人情報を書かない。
- ② 自分の個人情報をインターネット上に書き込まない。
- ③ 有害サイトにアクセスしない。
- ④ ルール違反は、犯罪になる可能性もある。

児童をネットいじめ、また、ネット犯罪から守るためには、教師の指導と共に家庭での保護者の指導も欠かせない。まず、家庭でできることは、

スマホやパソコンは、居間に置く

ことだ。このような分かりやすい、具体的なことを保護者に提示する。

子どもが小・中学生であれば、保護者の目の届く範囲でコンピュータを使わせる。時には、子どもがアクセスしているサイトを一緒に見る。友達の間でどんなサイトに人気が集まっているのか話題にする。保護者の指導が入りやすい時期に、インターネットのルールを身につけさせ、大人になっても正しい使い方ができるようにさせたい。

保護者会や個人面談等で、家庭での保護者の目が、子ども達をネットいじめ、ネット犯罪から守ることを伝え、家庭との連携を図る。

子ども達の安全確認のためにスマホを持たせる家庭が増えた。しかし、スマホがいじめの道具として使われ、子どもが被害者にも加害者にもなり得る。スマホの慎重な取り扱いが必要だ。保護者の責任において使い方のルールを教えること、フィルタリングの設定をして必要最低限の機能のみ使えるようにすること、やはり、子ども達がネットの被害にあわないような対策を立てることの必要性を保護者に話していくことが大切である。

(9)言葉で語らせよう

日常生活では、人は言葉と表情や身振り手振りなどを使って対話をしている。子どもも大人も同じである。時に、非言語のほうが主流となっている場合もある。むしろ、それが中心となってコミュニケーションが成立していることのほうが多い。

自分の思いや考えを100%言葉で語ることはできない。50%程度、言語化できればよいほうだ。そういう経験は、子どもに限らず大人も同じである。しかしながら、黙っていては何も始まらない。必要な時に、必要なことを、可能な限りの確に言葉で語るようにしなければならぬ。そこに、学校教育の存在価値があり、教師としての専門性が生かされることになる。

たとえば、学級目標やクラスのルールといった内容について決めさせる場合、次のような手順で言語化させるとよい。

- ① 今、自分が疑問に感じていることや問題を抱えていることを、メモしたりつぶやいたりしてみる。
- ② どのような学級にしたいかについて隣同士で対話(ペアトーク)したりグループで話し合ったりする。
- ③ 目標や憲法にふさわしいキーワードをできるだけ多く出し合い、クラス全体で話し合ったり整理したりする。

内言(インナースピーチ)を外言化させる過程を大切に、言葉で交流し合う経験を多く設定することである。言葉による相互交流能力を育てることで、問題解決力や合意形成力を身につけていくことができる。

(10)ネットいじめと表現力

ネットいじめについて考えてみると、いじめる側はAについてはAであると思込んでいるのである。事柄はさまざまな価値観が混在していること、異なる立場から事柄を眺めると異なる色も見えてくるということがわからないのである。よって、自分と違う考え方の立場の者が許せずに攻撃をしてくるのである。

しかし、異なる立場になれば異なる考え方が見えてくると理解している者もいじめる側に回ることもある。これは、考え方について理解をしていないからである。同じ考えになるということは、対象についての考察(判断や感想)が同じだということ、つまり対象を眺める立場が同じであるということである。しかし、考え方は実に多様なのである。

(11)ネットいじめを防ぐ対話力

「AとBから対象はCである」というように、具体例をもとにして考察し判断を下す思考を帰納的思考、「赤である。よってDである」というように、判断したことから意見や主張を展開する思考を演繹的思考と言う。人間は、この二つの思考を組み合わせて表現していることになる。人々の表現の違いは、この思考の在り方の個性にあると言える。

ネットいじめを防いでいくための「言葉の力」を育成していくには、この二つの思考の在り方の個性を認識した上での対話力を育成していくことが重要となる。

(12)伝えたいことを最後まで言うスキル

小さな頃から周りの人とのコミュニケーションの手段として使われているのは、口から発する言葉である。ネットに文字を書くという行為よりは、かなり慣れている。相手とコミュニケーションをとるには、対話は大切な手段である。ところが、その発話による対話も、最近の子どもたちを見ているとままならない部分がたくさんある。

たとえば、トイレに行きたい低学年の子どもが先生のところに来て、「先生、おしっこ」と言うことがある。このような場合、読者諸氏の中には「先生は、おしっこではありません」と返事をした経験の持ち主もいるであろう。正確に言えば、「先生、(おしっこがしたいので)トイレに行っていていいですか」となるだろう。

発話でさえ、このようなことがあるのだから、言葉を単語でしか示せないとなると、ネット上では、大変ぶっきらぼうな言い回しになる。

仲のよかった友達同士が、突然いじめの対象として攻撃するという事件はよくある。この場合、多いのはネット上でのトラブルが引き金になることだ。先ほどのトイレのように

- 1 言いたい事を正確に言えない
- 2 相手の立場を考えられない

というようなことが原因となる。このことに対応するために、次のようなスキルを身に付けさせる。

- 1 伝えたいことを最後まで言う
- 2 相手の話を上手に聞く

(13)最後まで伝えるスキル

TOSSが開発した国語スキルの中に『対話・討論スキル』(教育技術研究所)がある。これは、PISA型読解力育成のためのテキストであるが、コミュニケーション育成のためにも有効である。例文として次の状況が設定されている。子どもが「お母さん。しょうゆ」と言うと、母親は「テーブルの上にあるでしょう」と返事をする。実際は「ちがうよ。テーブルにしょうゆをこぼしたんだ」という内容である。

これは、子どもから出てきた最初の一言である「しょうゆ」に問題がある。なぜ「しょうゆ」なのか、ということが抜けているのである。このような事態を避けるために必要なことは、理由付けである。「~だから、しょうゆ」となれば、自分の言いたいことをできるだけ正確に相手に伝えていくことが可能になる。

このような理由付けというのは、授業の中で育てやすい。子どもたちが意見を言ったときには、必ずその理由を問えばいい。ノートに考えを書くときも、必ず理由を書くようにさせる。理由を付けることが当たり前という雰囲気をつくり上げる。そうなれば、ある子が答えだけを言ったとき、周りの子から「理由は?」と突っ込むようになる。

ある事例であるが、メールで「あの子を仲間はずれにしよう」と持ちかけた女の子に対して、「そんなことをしてはだめ」と、ずばり返信をした子に対して「なまいきだ」ということで、その子がいじめの対象になってしまった。これは、なぜそんなことをしてはだめなのか、ということをくわしく伝えることで、相手に真意が伝わったのではないかといえる。

(14)対話力を高める

①聴く力を高める

よき聴き手となることは、話し手の言葉を受け止め対話を開くだけでなく、話し手の相手意識を育てることに寄与する。しかし、聴くことは、けっして易しくはない。子どもたちだけでなく、大人でも自分の用件や思いを相手にぶつけるばかりで、相手の話はほとんど聴いていないことがよくある。私たち教師も、話すことに心がいき、相手の言うことを聴いていないことがある。

まず、相手の話に耳を傾ける。この姿勢を身につけ、聴く力を高める努力を積む必要がある。聴く力は一朝一夕には身につかない。日頃から意識して、聴く力を高める努力を続けていく必要がある。よき聴き手となれるよう努めていくには、次のような点に留意する必要がある。

- ①相手の目を見て聴く。
相手と向き合い相手の言葉をしっかりと受け止める。また、目を見ることで、言外のメッセージを読みとる。
- ②相手の言葉を最後まで聴く。
ともすれば、相手の言葉をさえぎって口を挟みたくなることがあるが、それは極力避ける。
- ③適度なあいづちや復唱をいれながら聴く。
聴いているということを相手に伝えることも重要である。
- ④相手がよい答えを出せるように聴く。

話し手は、聴き手の意見を求めているというよりは、自分の考えを整理したいと思って話している場合がよくある。相手の考えがまとまるように対応することが、大切である。

⑤聴いたことはメモする習慣をつける。

聴いたことも、そのままにしておくで忘れてしまう。誠実な対応をする上で、メモは不可欠である。

②「質問力」を鍛える

話し手から情報を引き出すためには、質問の仕方と中味が問題となる。イエス・ノーで応答できるような質問であれば、対話の継続性が弱くなる。その場合、聴き手が話し手に立場が入れ代わる。

勝手に話題転換するわけにはいかないから、受け取った話を再発信する「確認」発言が最低限として求められることになる。しかも同じ事を反芻するだけなら、オウム返しであり、対話の発展性が無くなってしまふから、情報付加したり、別質問をする必要がある。

対話を前進させる質問をする。

③確認としての「要約力」を鍛える

質問の前提として話の中味を要約し、確認する場面がある。要約であるから、内容の核心をとらえるものでなければならない。問題解決や悩み事の相談であれば、えてして冗長な割には中味がつかみづらいということが多い。要らない部分を削り、核となるところだけを切り取って、再提示すれば、話し手にとっても、中味が整理されていくので、対話が深まっていることが自覚できるだろう。

(15) ソーシャルスキル

集団行動をとったり、人間関係を構築したりするうえで必要な技能のことである。具体的には、授業や集団活動に上手に参加したり(学習態勢)、友だちや大人と円滑にコミュニケーションをとったり(コミュニケーション)、友だちをつくり関係を維持したりすること(仲間関係)などを指す。

ソーシャルスキルは、家庭や学校生活における大人との関係のなかで、また、子どもどうしの関係のなかで育っていくものである。しかし、発達障害などの困難をもっている子どもたちは、年齢相応のスキルが身につけにくく、学校や家庭、地域社会でうまく自己発揮できないことがある。そうした子どもたちを対象に、教育現場や相談・医療現場では、教師や心理士などの支援者がソーシャルスキルを身につけるための指導を行っている。

ソーシャルスキルの指導内容・指導方法は、子どもに応じて異なる。指導をはじめめる前に、子どもの認知特性・障害特性をよく理解し、個に応じた支援方法やプログラムを展開する必要がある。

(16) 必要なソーシャルスキルを見極める

子どもが社会生活を送るうえで必要とするソーシャルスキルには、様々な種類がある。本書では、個々のスキルを「主なねらい」にもとづいて5領域に大別している。1人ひとりの子どもに合ったスキルに着目し、指導の重点を置くようにする。

領域	スキル
学習態勢	着席する、見る、聞く、発言する、待つ、並ぶ、移動する、指示やルールを理解する、指示やルールに沿うなど
コミュニケーション	あいさつ・返事・お礼・謝罪・依頼などのやりとり、気持ちや考えを表現する、相互性のあるやりとり、報告・連絡・相談する、上手に話し合う、会話、視線やジェスチャーなどの理解と活用など
仲間関係	仲間意識、所属感、仲間にかかわる、協調的に遊ぶ、相手に注目する、他者に配慮する、友人関係の形成と維持など

(17) 必要なスキルを見極めるポイント

それぞれの子どもにより、必要とするスキルは異なる。「何が苦手なのか?」という視点だけではなく、「どのスキルがあれば人間関係や社会生活が楽しく送れるのか?」という視点で、優先順位をつけて指導するスキルを選ぶ。通級やクリニック、相談室などでの指導は、週に数時間(または月に数時間)と限られた時間になるため、あれもこれも指導ターゲットにはせず、①子どもの生活場面に必要であり、②達成しやすく成功体験になりやすいものを、③1~2個程度に絞って設定するとよいだろう。

(18) 基本テクニックを組み合わせる

ソーシャルスキル指導の基本テクニックには、ことばで直接的に教える「教示」、手本を示して学ばせる「モデリング」、その方法を実践してみる「リハーサル」、実践の結果を振り返る「フィードバック」、指導場面以外でも応用させる「般化」がある。これらのテクニックを組み合わせることで指導を行う。

教示	ことばや絵カードなどを用いて直接教える
モデリング	手本を示し、それを見せて学ばせる
リハーサル	模擬場面などで実際にやってみる(ロールプレイングなど)

(19) アサーション

「自分も相手(他者)も大切に自己表現」という意味である。アサーションの意味には、表現法という面もあるが、アサーションによる自己表現とは、単なる自分の「自己主張」や「言い方」ではなく、①自分の考えや気持ちを捉え、それを正直に伝えてみようとする。②伝えたら、相手の反応を受け止めようとするのである。コミュニケーションの中では、「話す」と「聴く」のやり取りとも言えるだろう。

(20) 安定したアサーションを身につける方法

① 自分の気持ちを確認

あいまいな考えや気持ち、悲しくもあり、腹立たしくもありといった対立する感情や迷い、困惑などといった自分の意見や気持ちを確認することである。正直に自分の気持ちを確認めようすると、いい感情、嫌な感情、迷い、緊張や不安など、さまざまな気持ちがあることに気づくことがあるだろう。そのような気持ちをありのままに受け入れ、大切にすることがアサーションの出発点である。

(21) 具体的な表現方法

① 自分の思いを確かめる

自分の思いや気持ちをはっきりさせることである。私たちの日常会話では、「こんなことが起こった」とか「こんなことを言われた」という話をよくするが、では自分はどうしたいのか、そのときどうしたかったのかについては伝えないことが多いのではないだろうか。このような場面では、「どうするか」の前に、「自分はどうしたいか」をはっきりさせる。それが明確になると、どうするかどのように言うかのヒントが見えてくる。

⑤ 「私メッセージ」で気持ちを伝える

自分の気持ちを明確にして伝えることを「私メッセージ」と言う。自分の気持ちを言うことは、いわば「私」を主語にして言語化しようということだからである。

たとえば、「大声を出さないで」「早くしなさい」「だらしない」などの表現の主語は、誰になっているのか。「あなたは大声を出さないで」であり、「あなたが早くしなさい」「あなたがだらしない」と言っている。つまり、「あなたメッセージ」になっている。では、この表現を「私」を主語にして言うとうなるだろう。大声に聞こえているのは私であるし、早くしてほしいのも私、だらしないと思っているのも私である。「私には声が大きく聞こえるので、小さくしてほしい」であり、「私が急いでいるので、急いでほしい」「私にはだらしないと思える」である。つまり、「私メッセージ」にすると「私が声を小さくしてほしい」であり、「私が急いでほしい」「私にはだらしないと思える」になる。自分が感じたり、思ったり、お願いしたりしたいことを、あたかも相手がそうしているかのように断定的に「あなたが～だ」と決めつけると、相手は「そんなことしていない」と思うかもしれない。その結果、気まづくなったり、後味が悪い思いをしたりするだろう。

そんなときは、「あなたメッセージ」を使っていないか振り返る。「私メッセージ」にするとどうなるか考えてみると、より率直で、決めつけに聞こえないメッセージを発することができるようになるだろう。

⑥ 「なぜ～?」「どうして～?」を言うときは気をつける

私たちは、人の言動の意図や理由を聞きたいとき、あるいは、どのようないきさつがあったかを知りたいとき、「なぜ～?」「どうして～?」と尋ねる。

しかし、「どうしてそんなところに行ったの?」「なぜ、そんなことをしたの?」という言い方は、「そんなところに行くべきでなかった」「そんなことをしてはいけなかった」と非難する意味でも使う。

つまり、「なぜ～?」「どうして～?」という表現には、理由など聞くつもりはなく、問答無用で責める意図が含まれやすい。

誤解される可能性が高い言葉だから、理由やいきさつを聞きたいとき、「なぜ～?」「どうして～?」は使わないでどのような言い回しができるか、考えてみるとよい。たとえば、「意図や理由、いきさつについて知りたい」とか「聞かせてほしい」と伝えることである。

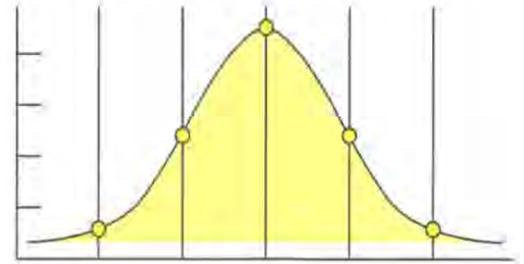
(22) ChatGPT

2022年11月に OpenAI (オープン AI) が公開した対話式の高精度な AI チャットボットである。名前にチャットとついで

ているように、音声で対話するわけではなく、文字で AI と対話をする。英語はもちろん、日本語を含む多言語に対応しており、しかも自然な文章で答えることが出来る。Chat GPT は GPT という言語モデルをベースにしている対話式 AI (人工知能) である。GPT は「Generative Pre-trained Transformer」の略で、そのまま訳すと、「事前学習された生成モデル」という意味になる。

ChatGPT は意外にシンプルな仕組みで成り立っている。与えられた文脈から確率的に次に続く単語を予測しているだけなのである。たとえば、「情けは人の」と言われたら、多くの方が「為ならず」と答えるであろう。「犬も歩けば」と言われたら「棒に当たる」である。

質問に対する答えが複数ある場合、以下のようなグラフを思い浮かべてみよう。グラフで山になっているところは多くの人が答える確率の高い回答である。中心の山から離れる程、少数派のレア回答である。ChatGPT では、大規模に学習した内容から、山の部分のような確率の高い答えが返ってくる。そのため、ごく普通で無難な回答が返ってくるわけである。



(23) ChatGPT の得意、不得意な事

ChatGPT の特徴は下記の 5 つである。

① 自然な対話

ChatGPT は人間らしい会話を行うことができ、自然な言い回しや適切なレスポンスで対話を続ける。

② 幅広い知識

ChatGPT は様々な分野に関する知識を持っており、学術的な話題から日常的な質問まで幅広く対応できる。

③ 短時間で回答

質問に対して迅速に回答できるため、時間を節約しながら情報を得ることができる。

④ クリエイティブなアイデア

文章の作成やアイデアの提案など、クリエイティブなタスクにも対応できる。これにより、教材作成や授業計画に役立てることができる。

⑤ 柔軟な学習支援

児童生徒の質問に個別に対応できるため、教師が直接回答できない場合や、児童生徒が自習中に質問がある際に役立つ。

一方、弱点については、下記の 5 つである。

① 嘘をつくことがある(ハルシネーション)

真実に見える虚偽(ハルシネーション)を出力する問題。たとえば、「〇〇さんについて教えて」と ChatGPT に尋ねると、架空のプロフィールやエピソードをでっち上げて、それが本当であるかのように回答する。

② 最新的话题に対応できない

ChatGPT は「現在の日本の首相は誰ですか」といった最新情報に対応できない。これは、ChatGPT が 2021 年 9 月までのデータを学習し構築された人工知能であるため、その後の情報や出来事についての知識を知らないからである。

③ 質問が悪いと、回答の質が落ちる

適切な質問をししないと、求める回答を ChatGPT から得ることが難しい。

④ 数学が苦手

ChatGPT は日本語をはじめとする自然言語処理に優れているが、一般的なコンピュータが得意とする計算処理能力は高くない。「 259×3120 は？」といった簡単な掛け算の問題さえ間違えることがある。

⑤ バイアスを含んだ回答を生成することがある

ChatGPT は悪意のある指示や道徳的に問題のある質問には回答しないようにプログラムされている。しかしインターネット上のデータを学習素材としているため、人種やジェンダーなどのバイアス(偏見)を含んだ回答が生成されてしまう可能性がある。

ChatGPT は、正確な知識や情報を求めるためのものではない。基本的に 2021 年 9 月までの事前に学習済みのデータを基に答えるため、最新の情報やローカルな情報を尋ねた場合も、確率的に続く可能性が高い言葉で回答する。また事前に学習済みのデータは非公開のため出所は明確ではない。

計算に関しても、計算を行うというよりも、事前に学習済みのデータから次に続く可能性が高い内容を答えるため正確だとは言えない。

また、対話型の AI であるため、ある程度の長さは問題ないが、長文には向いていない。

(24)質問・指示の仕方

右図が無料版 ChatGPT の基本画面である。

下の方に「Send a message.」と薄く書かれた入力ボックスがある。このボックス内に質問文・指示文を入力し、入力ボックス内の一番右側にある送信ボタンを押す。ちなみに、スマホアプリでは音声入力も可能である。

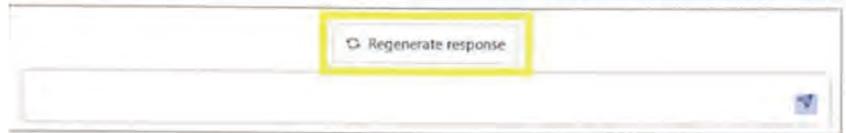
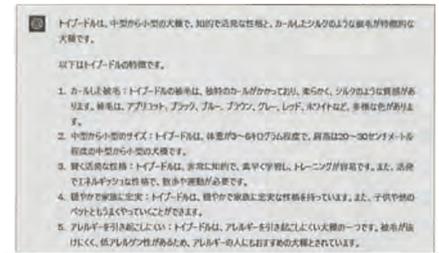
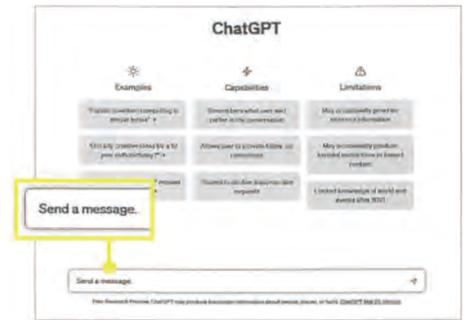
例：トイプードルの特徴を教えてください

右図がそれに対する ChatGPT の答えである。

(25)再回答

ChatGPT の出す答えに不満があるときは、差し戻して再度答え直しをさせることができる。「Regenerate response」と書かれているボタンを押すだけで OK である。PC 版では、質問・指示を入力するテキストボックスの上にある。

スマホの場合は、送信ボタンのとりにあるマークをタッチすると、答え直しをさせることができる。また「もう少し詳しく」「つづきを聞かせて」などと指示することで、ChatGPT の回答を掘り下げることができ



6. 単元計画

単元名	内容
ChatGPT で修正・改善する	
ChatGPT で共創・創造する	

7. 本授業案

指示：セリフ読みます。

発問：お母さんは何と言いますか。

説明：実際は、このような状態でした。

発問：「お母さん、しょうゆ」と言ったら、なぜ、雑巾を持ってきてくれたのでしょうか。それは、状況をどうしたからですか。四角に当てはまる言葉を入れてごらん。

発問：しかし、状況が把握できないときがあります。それは、これらを使っているときです。何ですか。

発問：これらのアプリ、国内利用者は、それぞれ、どれくらいいると思いますか。

説明：LINE は8400万人が Twitter は4500万人が利用しています。そのほかのアプリも、たくさんの利用者がいます。

指示：セリフを読みます。

発問：なぜ、Aさんは怒ってしまったのでしょうか。

説明：理由はこれです。

発問：トラブルがないように会話してみてください。

発問：Aさんは何を言ったらよいですか。また、Bさんは何をしたらよいですか。

説明：Aさん、Bさん、Cさんが日曜日、一緒に遊園地に行くことに決めていました。

指示：セリフを読みます。

発問：なぜ、BさんとCさんは怒ってしまったのですか。

発問:これを使います。何ですか。

説明:以下のセリフを読みます。

発問:ChatGPT を使って、解決策を考えてみて下さい。

8. 参考文献

- ① 2008.1 No.276『心を育てる学級経営』
- ② 2009.1 No.288『心を育てる学級経営』
- ③ 2007.7 No.270『心を育てる学級経営』
- ④ TOSS 国語 PISA 型読解力育成スキル対話・討論スキル
- ⑤ 平木典子(2012.2)『アサーション入門—自分も相手も大切にする自己表現法』講談社
- ⑥ 山崎志津(2023.6)『ChatGPT は質問・指示が9割』池田書店
- ⑦ 中村敏秀(2015.6)『特別支援教育をサポートするソーシャルスキルトレーニング(SST)実践教材集』(株)ナツメ社
- ⑧ 竹内和雄(2022.8)『イラスト版10分で身につくネット・スマホの使い方』合同出版
- ⑨ 竹内和雄(2020.10)『小学生のうちに身につけたいスマホ・ネット基礎・基本ワーク』合同出版
- ⑩ 谷和樹(2024.2)『9歳から知っておきたい AI を味方につける方法 (9歳から知っておきたいシリーズ)』マイクロマガジン社